

(151) 宮城県気仙沼の鹿折(ししおり)鉾山と資料館

北上山地の南部には驚く程多くの金鉾山があった。これらは現在の岩手県平泉に都を構えた奥州藤原一族の「金色堂」に代表される金文化の重要な供給源となっていた。第2次世界戦争後まで、幾つかの鉾山では採掘が行われていたが、現在では全て廃鉾山となっている。今回そのうちの1つ、鹿折(ししおり)鉾山を紹介する。この鉾山には、特記すべきことがある。1904年(明治37年)、巨大な金塊が採掘された。重さは約2.5kg、金の含有率は約83%であった。「モンスターゴールド」と名付けて、同年に開催されたセントルイス万国博覧会に出展された。その後、色々の事情があったようで、その6分の1だけが残し、現在は、つくば市の地質標本館に保管されている。写真1がそれである。

他に、参考文献(1)中には、「鉾石10貫(37.5kg)中2貫目(7.7kg)の金を産した。」との記述もある。



大きさは
ほぼ原寸！

写真1 鹿折鉾山産出の「モンスターゴールド」は6分割されてしまった。その中の現存している部分の外観写真である。その横幅は約7cm。写真の大きさはほぼ原寸大としている。なを、この写真は鹿折鉾山資料館のパンフレットより複写掲載。

鹿折鉾山へは気仙沼からならば、45号線から大船渡線(現時点で途中廃線)に沿った34号線に入り北上していく。約6kmほど進んで行くと、上東側根地区で道路が鉄橋下を通る。この所、道路の右側に鹿折鉾山案内板が立っている。それに従って、右側の側道に入っていくと、直ぐに鹿折鉾山資料館がある。ここは同時に、鹿折鉾山跡への入口でもある。付近にはある程度の空き地もあり、車を駐車できる。

資料館の開館状況はネットで調べられる。入館料は無料である。写真2,3で少し案内をしている。館内資料、外にある案内板より、鉾山跡を訪問するのは容易である。下から、4番坑跡、2番坑跡が紹介されている。文献(1)に掲載されている坑内図を図2として複写掲載している。今回確認した坑口は、第二坑と第四坑である。本探査記を手引きとすれば、その他の坑口跡の探査は少し容易になるかも。なを、現地付近一帯結構な数の坑口があったようである。

資料館のパンフレットによれば、最盛期であろうが、使用人は600人、事務員だけで20人であったそうである。

異常な程の高品位の鉾石は、当然局部的であろうが、とにかく驚くようなモンスターゴールドがこの鉾山から産出された。更なるそのような富鉾部がこの鉾山の何処かに眠っているのでは、と夢見るのは著者だけではないであろう。

この鹿折鉾山跡は綺麗に下草刈りが行われており、歩き安い。林道跡などに石英系の転石が結構転がっている。割ってルーペで見ると、山吹色に光る金が見つかるかも知れない。また、鉾山脇を流れている源氏の沢の下流では砂金が見つかるかも。

なを、北上山地南部の金鉾山として、本探査記では、今出山鉾山、玉山鉾山、太子鉾山、田ノ上鉾山については既報である。

探査日 2017年9月

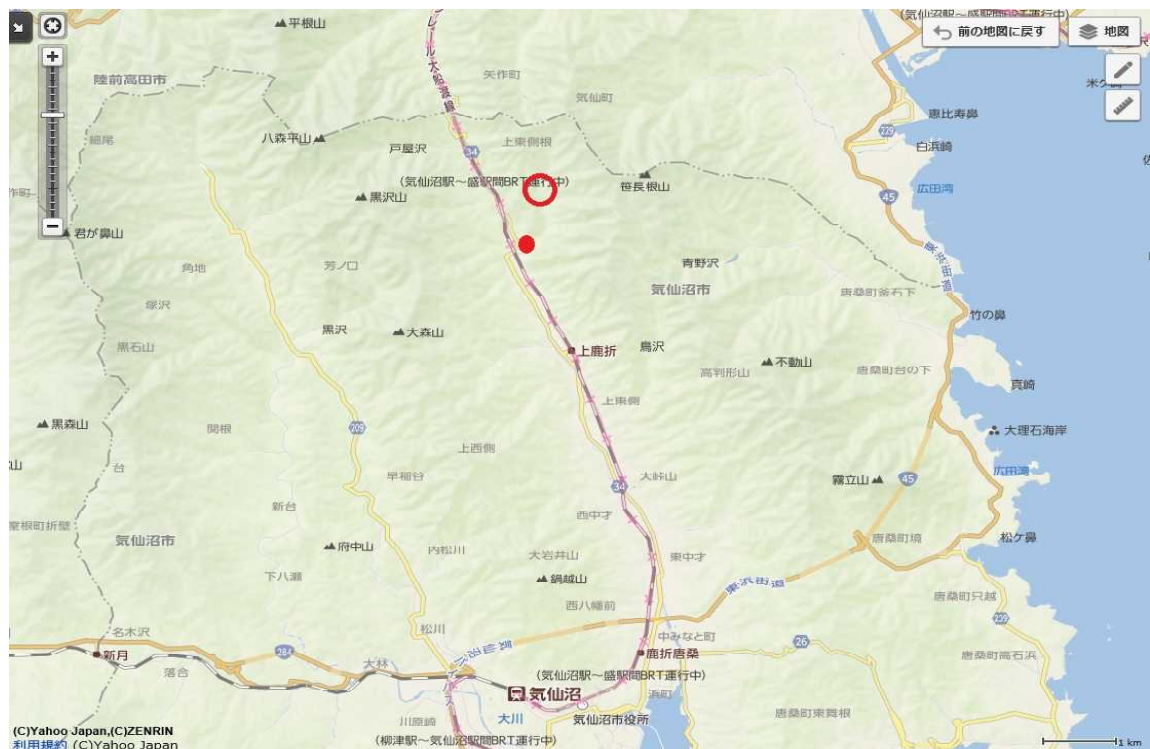


図1 赤輪で鹿折鉾山跡、赤丸で資料館の位置を示している。気仙沼から34号を北上、或いは、陸前高田から34号を南下するのも良いが、後者の場合は峠越でかつ道幅の狭いところがある。図の右側に、本探査記で既報の大理石海岸がある。又図の上の方になるが、陸前高田には玉山金山もある。これも既報である。

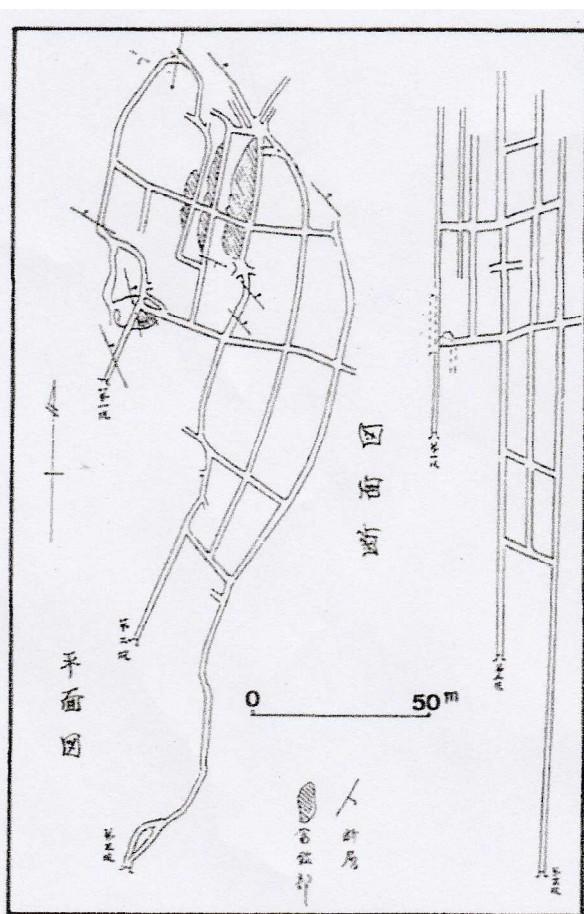


図86-2 鹿折鉾山坑内平断面図

図2 参考文献(1)より複写掲載。坑として「第一坑」、「第二坑」、「第三坑」が見てとれる。この他に第四坑が現存している。資料館の資料、文献(1)中には、他の名称の坑口が幾つもある。つまり、この図中に記されている坑口だけではないということである。落葉時期ならば林中の見晴らしが良くなるので、その時期にこのあたり一帯を歩き回るのも結構であろう。「宝」が見つかるかも知れない。

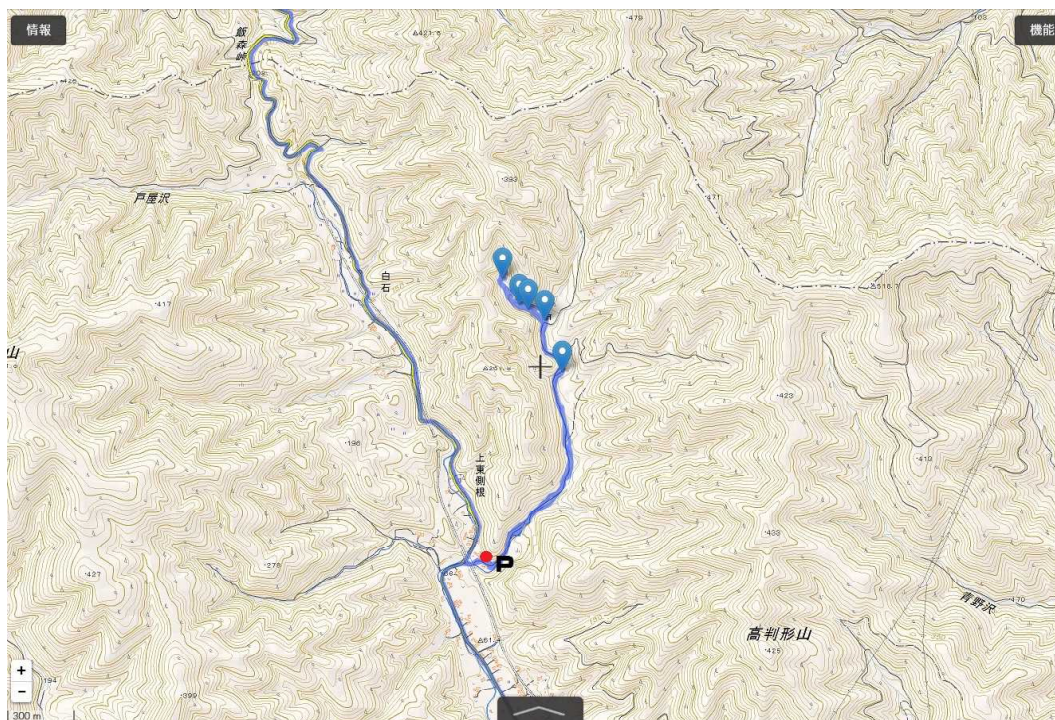


図3 ガーミンで測定した探査時の経路を水色で描いている。著者は、図の上部外の陸前高田の方から34号を南下して、資料館・鉾山入口に着いた。帰路は、図の下部外の気仙沼方面へと南下した。赤丸が資料館。Pが駐車場。鉾山跡へはPから源氏の沢沿いの林道を徒歩で北上していった。

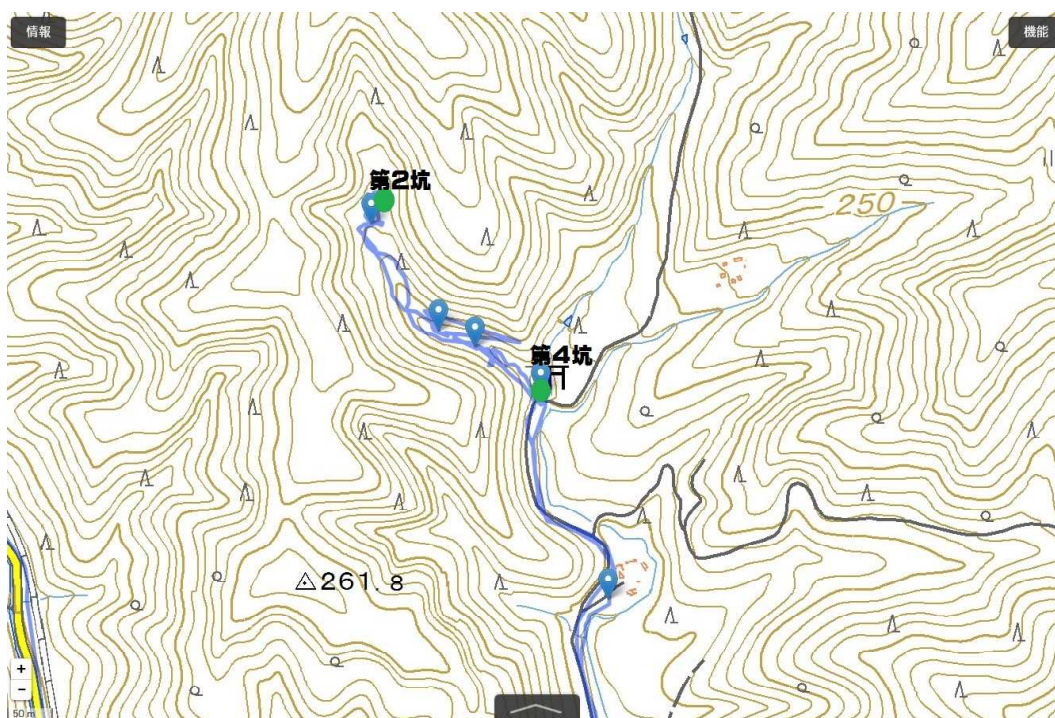


図4 図3の部分拡大図。黄緑丸は確認した坑口跡。第4坑跡と第2坑跡。図中には、第4坑の所に神社記号があるが、確認していない。見失ったのかも知れない。図2によれば、第4坑と第2坑の中間に第3坑があった。それなりのところがあったが、未確認。第2坑の上流に第1坑があったようであるが、これも未確認。自動車は第4坑までは、林道を進んでいける。第2坑跡までも、オフロード車なら行けそう。但し、この探査時のことであるが。

鉾山跡写真



写真2 上に見えるのは大船渡線の鉄橋。左側が主道の34号、右側が側道。右側の道端に鹿折鉾山案内板等が立っている。側道を進むと直ぐに鹿折鉾山資料館がある。空き地もあり駐車ができる。



写真3 鹿折鉾山資料館である。新築のようである。入口は開いており、室内に明かりもついていたが、誰もいない。なを、すぐ傍にプレハブの古い資料館もある。窓から覗くと物置になっていた。



写真4 鉾山資料が展示されているホール。見終わり頃、年配の方が入ってきた。挨拶すると、気仙語であった。資料館の「館長さん」であった。祖父が、この鉾山で現場監督だったとか。伺った話の中でビックリした話：通訳すると、「一時期、1日で1貫目の金を採掘した。」1貫目とは約4kgである。写真1を見るとそれもうなずけた。なを、著者は気仙出身であり、気仙語は母語。

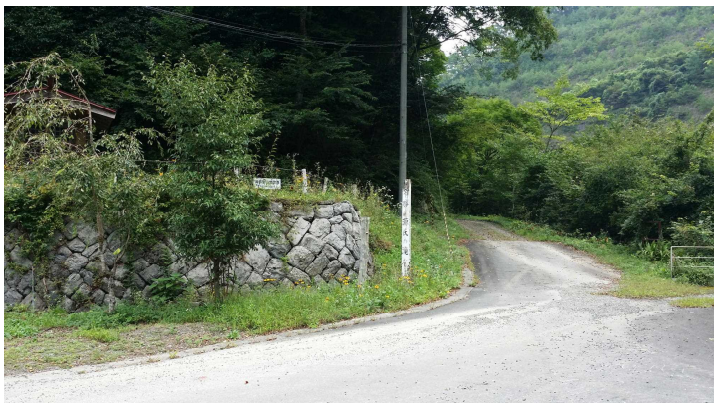


写真5 資料館の広場から鉾山跡へ沢に沿って延びている林道。この日はここから歩いた。4番坑跡まで約1.5kmなので30分程度か。館長さんは車でも行けると言っていたが、初探査でなので。写真の左側に社がある。気が先を向いていたのか詳細は未確認。



写真6 林道を進んできた。4番坑の場所。周りは開けた広場になっている。案内板が立っている所の左側の板橋をわたると直ぐに4番坑跡。



写真7 写真6の中央に立っていた案内板を接写。内容は写真を拡大して読んで下さい。良い情報が読み取れよう。



写真8 4番坑入口。金網で閉塞されていた。下草刈りがしっかりと行われている。資料館に感謝である。



写真9 金網を通して、4番坑入口の内部を見る。内部を観光できるようになり、金坑脈が肉眼で観察できるようになったならば。かつて、福島県猪苗代湖近くの金鉱山であった高玉鉱山跡で、著者はトロッキに乗って坑道内観光をした。現在は？



写真10 4番坑跡から2番坑跡に向かっている途中。このあたりに第3坑があったようである。が、未確認。右側斜面はズリ？ 林道脇には、プラトー部が幾つもある。施設跡と思われる。林道には石英の転石が多い。じっくり観察するのも良い。



写真11 2番坑前の原っぱ。中央に案内板が立っている。このあたりに石英の転石が多い。



写真12 怪物金塊（モンスターゴールド）を産出した2番坑口前の案内板。看板の左側、少し遠方にある四角い黒い部分が閉塞された2番坑入口。この付近一帯、ズリ、転石だらけである。前方の上に、林道が上に向かって綺麗に延びている。が、今回ここより先には行っていない。従って、1番坑があるはずであるが、これも未確認。

採集鉱物

林道での転石、ズリから石英系の転石などをハンマーで割って採集した。破断面中には、肉眼では少し難しいが、ルーペでは良く金色に光る小さい薄膜状のものがあちらこちらに見える。黄鉄鉱なのか、それとも金なのか？ 多分黄鉄鉱であろう。やはり黄鉄鉱であった。次回を期待しよう。

参考文献

- (1)「日本金山誌 第3編 東北」、社団法人 資源・素材学会、1992年。

鹿折鉾山跡追探查

1年前に、本鉾山の第2坑までは確認できていた。今夏、本鉾山を再訪し、第2坑より登り上がったところで、2箇所坑口跡を確認した。どちらかが本報図2に記されている第1坑であると思っている。あちこちに落ちている石英付きの転石中に、金の粒、金の薄膜を見つけようとしたが、見られる金ぴかはどうも黄鉄鉾の微粒のようである。

現地にある資料館では、鹿折鉾山産の金鉾石の実物を手に取り、懐中電灯で照らして観察することができるようになっている。が、何十個と並べてある「金鉾石」を、持参のルーペで観察しても山吹色に光るものは見つけられなかった。眼で見分けができない程の微粒なのであろう。金鉾石といっても肉眼で「金」を確認できるような鉾石は希であるとの聞き覚えがあるので、さもありなんとも思っている。が、自宅でじっくりと観察してみることにして、道中で石英が豊富な幾つかの転石を採集した。

ところで、数年前に、他の岩友が群馬の金鉾山跡で採集したという両手で持つほどの大きさの石英の塊を見る機会があった。何カ所かに小さいながら「山吹色」の点を肉眼でも確認できた。やはり、金野色は「金色」ではなく「山吹色」であると確信した。

資料館から第1坑跡までは、道の手入れも行き届いており、軽いハイキング道でもある。天気がよければ、気分爽快であろう。

探査日 2018年8月

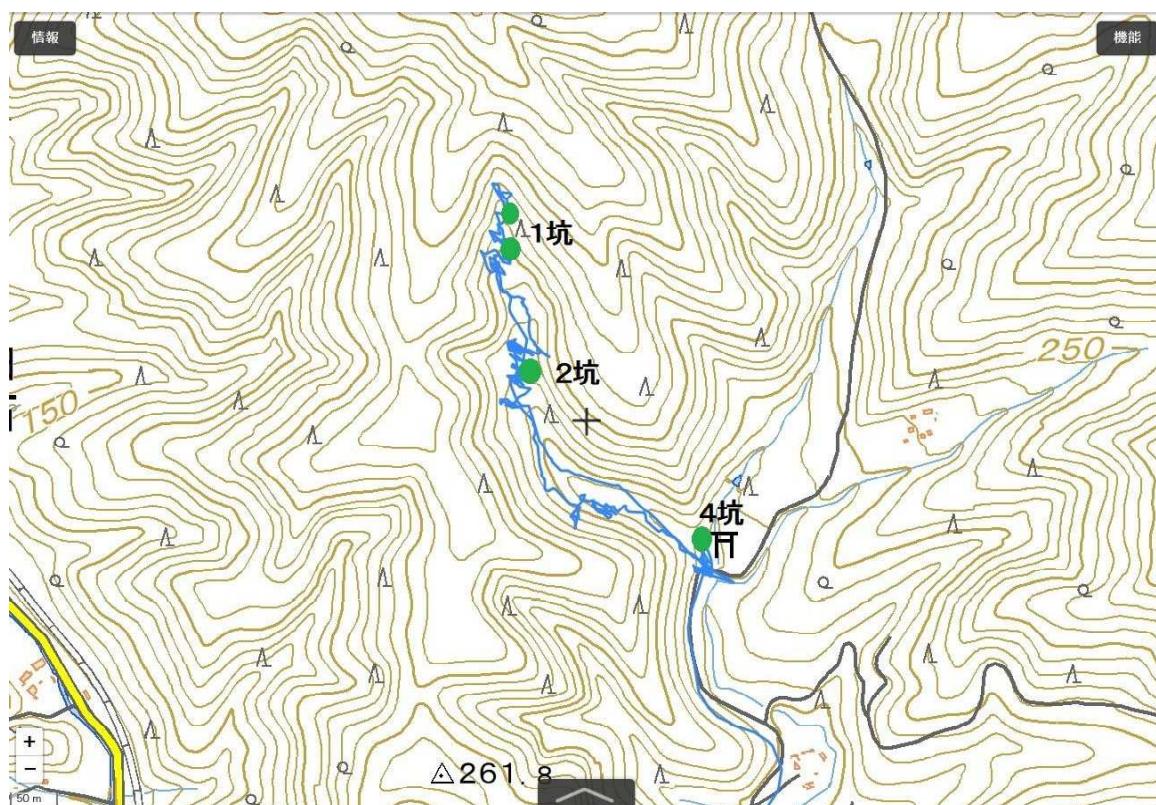


図1 本報の図4と対比させると良い。黄緑丸が坑口跡。本報の図4では第2坑の所までの探査であった。今回、第2坑の先に登り上がり、緩い沢の左岸側に2つの坑口跡を確認した。どちらかが本報の図2に記されている第1坑と思われる。本鉾山の稼業時の古写真を資料館で幾つか見ることができた。それによると、少なくとも第2坑あたりは当時、一帯にズリが巻かれていたようである。従って、第2坑付近で、腰を据えてじっくり転石を観察すれば、「山吹色の痕跡」が見つかるかも知れない。

鉋山跡写真



写真1 第2坑から登ってきて、左岸側で見つけた、潰れた坑口跡と思われる箇所。



写真2 写真1から更に少し沢を登り上がった、同じく左岸側にあった坑口跡。中央の黒い箇所が坑口。丸太などで一応閉塞されていた。



写真3 写真2で示した坑口跡の内部の様子。しっかりと坑道が奥に伸びている。こちらの方が第1坑なのかも知れない。この坑口跡の上流に少し登って行ったが、坑口らしいものは確認できず。

資料



写真4 資料館で展示されていた鹿折鉱山産の金鉱石。ラベルに自然金と書いているが、この岩石のどこなのか？金属光沢のある小さい箇所なのか？ 写真を拡大してみれば、わかるかもしれない。一般に鉱物の展示品に見かけるが、母岩と一体になっている場合、母岩中のごく一部である場合には、しっかりとした案内がないと肝心の鉱物がわからない場合が多い。が、この写真には6個の「岩石」が写っている。この種の岩石に自然金が入っているのであろう。つまり、この写真から母岩、いわゆる金鉱石がわかるので、これを手がかりに転石を見分けると良いであろう。

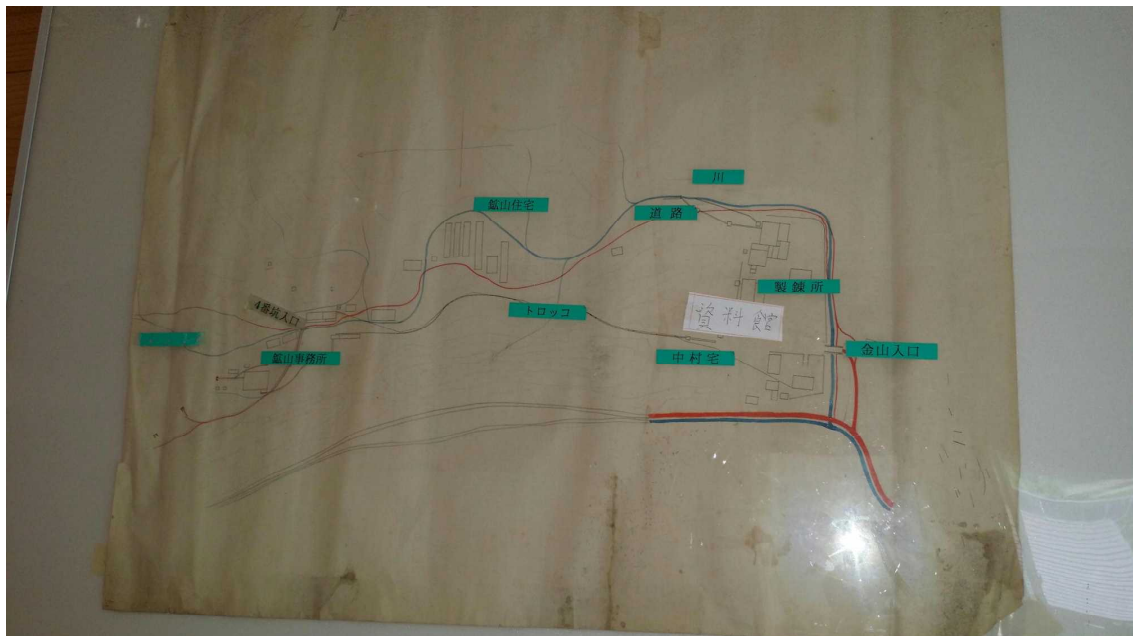


写真5 資料館に掲示されていた鹿折鉱山稼業時の現地図。写真中の「資料館」は現資料館。沢に沿った道を進んでいくと第4坑まで辿り着く。